京都文藝復興

京都文藝復興

二十世紀は、科学と技術の長足の進歩とはうらはらに、
混沌と汚濁に満ちた世紀であった。
国家、宗教、民族間の果てしない対立と闘争、
貧困と飢餓と殺戮の悲しむべき世紀であった。
遠く十三世紀末、ルネサンス期に湧き起った人間賛歌の思想は、
人間の存在を万物の至上におく近代思想となり、
やがて欲望の歯止めのきかない激流となって、
ついには人類自らを生存の危機に追いやった。

しかし、今日ようやくにして、
人間は自らの誤りに気づきはじめた。

果たして人間とは何か。

有史以来人間は、
喜びと悲しみ、愛と憎しみ、希望と絶望に翻弄される宿命を負いながら、
万物のひとつとして、その共生の中で、
生存してきたのではなかったか。

生きるとは何か、生命とは何か、それらを大きく育む宇宙とは何か。

哲学や宗教、文学や芸術表現が追求し続けてきた、この根源的な問題について、
今や良心ある多くの人々が、生涯をかけた探求へと向かいはじめている。
我々はそこに、万物に対する謙虚さと天地自然への畏敬の念に満ちた、
創造的精神の復興の兆しを見いだし、
現代を超克し未来を拓くに至る、たしかな可能性を確信する。

学生諸君、
この時代、この日本の姿を、
きみたちの鋭く純粋な眼でじっと見つめてほしい。

そして
きみたちの先輩が重ねてきた青春の試みの数々と、
何よりも
きみたちの美と真実を求めるいきいきとした心の姿が、
芸術の国日本を再び蘇らせる運動、精神の尊厳を回復する戦いへと
この学園を立ち向かわせてくれることを願う。
きみたちの存在と
きみたちの共感なくして、
学園の未来はありえない。

教育の使命とは何か。改めて問い直したい。

いまや、世代や人種、国境を超えて、
心あるすべての人々と共に、
真実を求め、理想を語り合い、希望を育む土壌となるべき、
新たな学園像をこそ、構築しなければならない。

東洋の思想と叡智を基調とする、
人間精神復興の壮大な実験と冒険に挑む勇気と、
芸術文化探求への絶えることなき研鑽が、
人類を希望ある未来へと導くことを信じ、
学問と宗教、芸術と文化の都、
この京都の地から発する文芸復興の鼓動が、
日本の魂を静かに深く揺り動かすことを願って、
ここに新たな出発を誓う。

学校法人瓜生山学園
創設者　徳山 詳直

□「通信による芸術教育」が示す芸術文化の可能性

一九九八年四月、本学園に、全国で初めての四年制総合芸術大学の通信教育部が開設しました。入学希望者の在この通信教育部には、一二、〇六六人の社会人の方々から入学の希望がありました。入学希望者の在住地域は、関東、近畿を中心に沖縄から北海道まで全国に広がっており、年齢も三〇～四〇代を中心に二〇代から八〇代までと幅広く、学歴も、高校卒から大学短大卒、さらには大学院卒まで、まさに多種多様です。そのうち一、四〇〇人の人たちが入学し、京都・瓜生山に集まって、熱気に満ちたスクーリング授業が行なわれました。

従来の通信教育部は、何らかの事情で大学に学ぶことのできなかった人たちが、大学卒業資格や教員免許状など、さまざまな資格を求めて入学するというのが通例でした。しかし、本学に入学した方々の入学理由をみますと、単なる資格の取得にとどまらないことがわかります。現在の自分の生き方をいま一度再考し、混迷する時代の中で、芸術文化に新たな価値観や世界観の可能性を見出し、本来の意味での生涯学習の機会を求めて、集まってきているのです。

そして、もうひとつ特徴的なことは、芸術文化を京都で学ぶということに、たいへんな期待を寄せているということです。京都にある芸術大学だからこそ、本学園を選んでいるのです。

通信教育部の初年度の募集だけでも、これほど多くの人々が、芸術文化の本質を学ぶために、全国か

ら京都という地に引き寄せられるように集まってきたという事実は、私たちに、新鮮な驚きをもたらしました。

この夏スクーリング授業のために集まった社会人の方々は、いうまでもなく、観光のために京都にやって来たわけではありません。京都で芸術文化を学ぶために集まったのです。八月一〇日から九月五日まで二七日間にわたって、京都に触れ、京都を知り、京都で学んだ成果をもって、また全国各地に帰っていったのです。この運動は、これからもずっと、毎年続いていきます。この年が初年度の通信教育部は、四学年が揃う二〇〇一年には一万人を超える規模になります。高い志と熱意をもって芸術文化を求める一万余の人々が、毎年、京都と全国各地とを結ぶ役割を果たすことになるのです。

私たちは、そのことの意味を深く受け止めたいと思います。そして、そこに日本文化と京都の将来に対する希望を見出し、私たちの大学改革の原点に据えたいと思います。

□学問と宗教の都市、京都

京都は千年以上の歳月、学問と芸術の都市として、全国から青雲の志に燃えた人々を集め、生気みなぎる都市として展開してきました。

平安の王朝文学や芸術を生み出した文人や画工たち、くだっては、狩野派や円山派、淋派に連なる画

人、蓮如、一休、吉田兼具らの宗教家、茶道・華道の源流をなした千利休や池坊専応、また藤原惺窩、本居宣長、伊藤仁斎ら儒学、国学、古学の大人たち、曲直瀬道三から山脇東洋にまで至る医家、宮崎友禅、樂長次郎、野々村仁清などそれぞれに派をなした工芸家たち。京都で学び、京都を活躍の場とすることによって、芸術文化の祖となり大成者となった人々は、枚挙に遑がありません。

京都が、こうした豊かな芸術文化都市たりえた背景には、中世以来の伝統があります。中世には、中国古典の研究・教育が、五山をはじめ多くの寺院で行なわれ、こうした蓄積に町人の経済力が結びついて、近世、京都の学問と芸術文化が発展する原動力となりました。

中世まで歴史を溯ってみるまでもなく、現在の京都にある大学を見わたしてみれば、教育と宗教との結びつきが極めて深いことに気づきます。

京都市域には、六校の国公立大学、二校の公立短大と二二校の私立大学、一五校の私立短期大学があります。この私立大学二二校のうち一一校、私立短大一五校のうち一〇校、すなわち私学三七校のうち二一校が、実は、宗教を母体としているのです。その中にはキリスト教の精神を掲げる大学が四校ありますが、それもまた、京都の豊かな精神風土を表わすものにほかなりません。

このように、ひとつの市域に四〇を超える大学が集まり、しかもその大きな部分が宗教を母体にしているのは、全国でも京都だけです。

京都には、三、〇〇〇を超える寺があり、二、〇〇〇をわずかに下回る神社を加えると、五、〇〇〇に

のぼる社寺が存在しています。同じ寺といっても、京都には、全国に末寺を抱えた本山が数多く存在しています。中世から近世にいたる時代、人々は宗教と学問を究めるため、京都の本山をめざしました。京都は、まさしく宗教と学問の府でありました。

京都の私学の創立もまた、古く天長年間（八二四〜八三四年）に空海によって興された綜藝種智院まで溯ることができます。そして、驚くべきことに、その精神は、現在もなお、真言宗東寺を母体とする種智院大学に受け継がれています。

このように、教育と宗教とは深く結び合って、遥か一、二〇〇年にわたる京都の学芸の歩みを支えてきたのです。

□大学流出の根底にあるもの─京都文藝復興へ

今日、残念なことに京都市域から大学の流出が相次いでいます。その理由として、市域内での用地確保の困難さや工場等制限法の規制が、しばしば指摘されています。

しかし、それ以上に、京都の支えである学問、芸術、宗教に対する認識の欠落、これこそが問題なのではないでしょうか。

政策というものは、まさに、都市についての哲学の表明でもあるはずです。そうだとするならば、私

たちは、さらに深くこの問題を考えてみなければなりません。

今日までの、京都における諸大学流出の経過をふりかえると、次のとおりです。

一九六七年　京都文教短期大学が宇治市槙島町に移転
　　　　　　その後、一九九六年に同一キャンパス内に京都文教大学を設置

一九八六年　同志社大学と同志社女子大学が京田辺市（当時の田辺町）に校地を開設
　　　　　　「田辺キャンパス」に同志社女子大学短期大学部を設置

一九八七年　成安女子短期大学が長岡京市に移転

同　　年　平安女学院短期大学が高槻市に移転

一九八九年　龍谷大学が「瀬田キャンパス」に理工学部、社会学部を開設

一九九三年　成安造形大学が大津市に開学

一九九四年　立命館大学が「びわこ・くさつキャンパス」に理工学部を移転

こうした大学流出の結果、本来、京都で学ぶはずであった大学生約一六八、〇〇〇人のうち、四四、〇〇〇人が京都を去って行きました。これは、実に学生総数の四分の一を超える数字です。

次代を担う四四、〇〇〇の青春、それも豊かな教養を備えるべき若者たち四四、〇〇〇人が、学芸都

市・京都で青春を送る機会を失ったということは、郊外の広く設備の整ったキャンパスで学ぶこと以上に、失うものが大きいはずです。そのことは、京都にとって、さらには日本文化の将来にとって、まことに不幸な事態だといわざるをえません。

果たして、戦後、京都の復興のためにどういった政策が取られてきたでしょうか。

一九九〇年から問題化した京都ホテルの高層化、平安建都一、二〇〇年記念事業として計画された京都駅の高層化、さらに溯れば、一九六四年東京オリンピックの開催に合わせて計画された京都タワー建設。こうしたものには大幅な規制緩和策がとられながら、なぜ学問と芸術の復興のためには思い切った政策が行われなかったのか。かえすがえすも残念でなりません。

それればかりではありません。こうした一連の政策が、市政と宗教との間に深い亀裂を生み出す結果となったことは、京都における教育と宗教との深い結びつきを考えるならば、いっそう憂慮すべき問題であるように思われます。問題は、経済の発展か景観の保全か、という次元にとどまるものではありません。

京都から、寺と大学、すなわち、宗教と学問を取り去ったら、いったい何が残るでしょうか。

日本全体が精神的支柱を失っているかにみえる今日、日本文化の中心といわれる京都、それを支えてきた学問と芸術と宗教と市政との豊穣な結びつきを取り戻すことが、次の時代に新しい学問と芸術文化の可能性を拓く大きな力となるはずです。

そして、中世イタリアのルネサンスが、芸術文化の清新な息吹と豊かな産業の勃興との結びつきによって興りえたように、京都の文芸復興はまた、産業とも深く結びつくことによって、互いに輝きを増すに違いありません。
このことを私たち市民がしっかりと認識するところから、京都の再生への道がはじまるのだと思います。

□危機を克服し未来へ希望をつなぐために

かつて京都は、二度の大きな危機を経験しました。いうまでもなく、ひとつは応仁・文明の乱、もうひとつは東京遷都です。
応仁元年（一四六七年）から文明九年（一四七七年）まで続く応仁・文明の乱によって、京都の市街地の大半は、焦土と化しました。
しかし、京都は滅び去ることなく、学問と芸術は見事に復興され、寛永から元禄にかけて光悦、宗達、光淋に代表されるような、蒔絵、陶器、茶湯、書道、出版など多彩な芸術文化が開花し、京都が日本文化の最大の中心地といわれるに至った、文化的な基礎が築かれました。
続く京都存亡の危機は、明治期の東京遷都でした。武家政治の完全な終焉と封建制打破による近代化

に向けた国家的決断であったとはいえ、これによって京都の人口は三五万人から二三万人に激減し、平安遷都以来一、〇七五年目にして、京都は王城の地としての生命を終えました。

この危機を、京都は近代化政策によって乗り切りました。これはたいへんな努力のもとに達成された偉業でした。

いま、京都は三度目の大きな危機に遭遇しています。その危機は、ただに京都の危機というにとどまりません。今日、日本そのものが大きな危機に直面しています。

応仁・文明の乱が京都を焦土となしたにもかかわらず、学問と芸術とが見事に復興しえた理由はどこにあったのか。

また、東京遷都によって京都は滅び去る運命におかれたのに、なぜ再生に成功しえたのか。

あるいはまた、その近代化策には、どのような功罪があったのか。

こうした問いかけから、私たちは、危機を克服し未来に希望をつなぐための手だてを、学ぶことができるのではないでしょうか。

□私たちの時代認識と大学改革

私たちの学園は、この危機を人類の存亡、人間としての精神の尊厳に関わるものと捉え、大学創設の

辞に、ひとつの時代認識として次のように記しています。

この大学は現代文明への深い反省と激しい苦悩の中から生まれた。

新しい世紀を目前にして、私たちは今日、大きな壁の前に立たされている。
科学技術と経済論理によって支配された現代社会は、
それ故に、人類史を貫いてきた精神の尊厳、
人間であることの意味を、根底から問われるに至った。
もはや、国際化、情報化という手段のみによっては解決できない。
良心を手腕に運用する新しい人間観、世界観の創造こそ大切ではないだろうか。
私たちは、芸術的創造と哲学的思索によって、この課題に応えたい。

（一九九一年四月　京都造形芸術大学創設にあたって）

京都を抜きにして本学園は存在しえず、また、学問と芸術の復興、すなわち学芸都市・京都の再生なくして、本学園がめざす日本の芸術文化の復興はありえません。
科学技術と経済論理が支配する現代の文明に代わって、芸術文化を原動力とする新しい文明への展望

を、京都が先頭に立って切り開いていかなければならないのです。

新しい世紀は、人類と自然への深い愛情に満ちた哲学を生み出すことから、はじめなければならない。日本にとって、このような教育こそもっとも重要な課題ではないでしょうか。今日の日本の姿に苦悩し、その解決のために汗を流す大学。若者たちと共に、人類が直面する困難な課題に、果敢に立ち向かう大学。本学園は、日本が苦難に直面すればするほど、日本のために光り輝く大学でありたいと願っています。